

火星



平成20年12月号

七曜抄 (五)

山尾玉藻

実椿をいろうて夜の神詣

一木の黄葉降らせて冬囲ひ

神留守の田のいちまいは鶺鴒らに

黄落やブルドーザーの小座布団

青空にななかまどの実十二月

綿虫の色を言ふべく窮しけり

茶の咲ける夕べは声をつかはざり

男山駅の箒の冬ざるる

松の媼松の翁と冬の影

神鷄の長鳴き雪を呼びにけり

太白星

柳生千枝子

霜月と聞くさへ寒き独りなる
冬の雲仰ぎて夫の在りし日よ
顔見世の華やぎさへも忘れぬし
梟の木の奥に在る闇おそろし
息白く吐きつつ少女早口な
冬帽の少年の頬笑みこぼす
枯草のいろ暖かし母の里

杉浦典子

霧はれし滝の振れてをりにけり
ワイン樽に小さな蛇口秋高し

葡萄園の鋏ぬぐうて返しけり
長梯子あづかつてゐる月夜かな
昼酒のまなぶたぬくし芋嵐
初鴨や母の忌近き切符買ふ
橡の実の落ちたる沼に日の当たる

浜口高子

うすべにの初萩夫の夢もなし
座布団の一枚足らぬ月の膳
川霧へ真赤な毛鉤抛られし
白樺の樹皮の反りゐる厄日かな
笛吹川の音こもりゐる葡萄房
舟の腹打ちどほしなる落し水
折れ竹の鋭角模様秋しぐれ

火星作品

山尾玉藻選

盆唄のあやふきあたり饒舌な
神戸深澤鱻

地蔵会の菓子袋より雨雫

朝市のうしろ蓮の実とびにけり

幼子のつむり福助月の径

手摺みす二百十日の桶の鯉

とりどりに吹かれ糸のころ秋暑し
大和郡山城孝子

水音や風船かづら飛びたいか

秋の雲石屋は石にまたがりて

鶏小屋の中に日のある亥の子かな

木の葉落つ音に振り向く冬支度

夜鴉に月のポプラのさやぎけり
八幡大山文子

母の眼を見て嘘つきぬ葉鶏頭

帰りたい帰れない母鳥威

ぬかるみに大きき足跡みなし栗
月天心腓返りに目覚めたる
海鳥の空を鳴き過ぐ運動会
白波の沖より立つる唐辛子
前山の葡萄棚より明けにけり
榎の木に夕映えぬたる鴝の贄
ちちろ鳴く駅のホームの喫煙所
サラ・ポールの声に糸瓜のゆれにけり
女郎花作り過ぎなり枯らしをり
陰膳の三月を越えし今年米
不揃ひの鱚の軒に乾きつつ
白鷺が覗く稲穂の垂れぐあひ
硝子器の白桃に錆まはりけり
しやちほこの尾の晴れきはむ菊花展
豊年や村のすみみよく乾き
源流の石踏んでゆく茸狩
山守に釣瓶落しの水こだま

宝塚 蘭定かず子

大東 堀 志 皋

明石 戸 栗 末 廣

選のあとに

山尾 玉藻

盆唄のあやふきあたり饒舌な

深澤 鱧

「盆唄」の始まりは伊勢踊や念仏踊の囃し唄とされるが、その後の様々な変異を経て、今ではごく世俗的でくだけた内容となったものもある、それだけに、現在の「盆唄」は俗世の悲喜もごもが籠められたものとも言えるのだろう。掲句の「あやふきあたり饒舌な」よりは、歌詞の内容がかなり俗っぽくなった箇所から急にテンポが速まり、さぞや内容もくどくどしくなると察せられる。そこに、作者は人と人の世の哀れさを却って強く感じたのである。

木の葉落つ音に振り向く冬支度

城 孝子

戸外で冬の到来に備える作業をしていた作者は、背後で不意にした小さな音に振り向き、それが「木の葉」が落ちた音であったと気付いたのである。それだけの些細なひと齣であるが、この「木の葉」が立てた細やか奮日にこそ冬の到来が確かにある。地味な句柄であるが、「冬支度を通して微妙な季節感を掬いとった佳句である。

母の眼を見て嘘つきぬ葉鶏頭

大山 文字

人は時によって嘘をつくが、そんな場合は後ろめたい思いがして相手の眼を真っ当に見られないものである。その点

掲句の「母の眼を見て嘘つきぬ」の「眼を見て」からは、必要不可欠な嘘をどうしてもつかねばならぬという作者の強い決意が窺い知れる、しかし、嘘はやは嘘でしかない。鮮烈な彩りの「葉鶏頭」との取り合わせに、作者のこころの疼きを感じられ非常に切ない。

海鳥の空を鳴き過ぐ運動会

戸栗 末廣

海辺の学校で「運動会」が開催されていて、その空を「海鳥」が悠然と鳴き過ぎた景である。いつもと変らぬ海の日常的な空の続きに、今日ばかりは賑やかな「運動会」の非日常的な空があり、映像的に面白い。しかし「海鳥」にとつてはいつもの空に違いはなく、二つの空を閑りなく飛び交っている景が楽しく、明るい。恐らく「運動会」で類想、類句が無いだろう。

白鷺が覗く稲穂の垂れぐあひ

堀志 皋

「白鷺」が泥鰌か蛙を狙って稲田を覗きこんでいる景は、それほど珍しいものではない。しかしその景を、いかにも「城鷺」が稲の稔り具合を確かめているように見立てて、読み手にあれつと関心を抱かせた。楽しいイメージシフトに、この作者らしい軽妙洒脱なセンスが光っている。

硝子器の白桃に錆まはりけり

蘭定かず子

「白桃」は剥くと直ぐに茶色に変色してしまう。その様子を表すのに、「錆まはりけり」とは誠に的を得た表現である。透明な「硝子器」の中なら、「錆」のまわりも尚更速く感じられたことであろう。(以下略)

恒星圈

岡 和絵

飯塚 糸子

八朔や工芸村の灯の低し
鳥渡る愚陀仏庵の畳かな
抽斗の中の筆入れ秋暑し
井戸水を供へし地藏祭かな
南祭の大竹藪に槌の音

大山 文子

月代の廊に唐櫃干されあり
苦瓜の葉裏の見ゆるあたま痛
かまつかの辺に固まりぬ通夜の客
掛稲に叡山電車並行す
草を焼く煙地を這ふ稲の花

長田 曄子

城孝子さんの句集上梓に
朱表紙の真中に金文字初紅葉
棗降りなつめ忘れし空のあり
少年の日の夫にあり棗の実
台風外れふたりの前のカプチーノ
色鳥や再発せしとぽつと言ふ

蘭定 かず子

待宵の開け放ちある蔵座敷
無患子の実がポケットにある日暮
輪番の堂の錠前水の秋
弓袋の追ひ越してゆく月の橋
膝ついて撮る草の丈つゆけしや

獅子座

山尾玉藻推薦

松山直美

自転車の軋みつつ来る野分晴
蔵壁の鶏頭の影折れぬたり
唐辛子ほんの些細なことなのに
先を行く人に歩合はす良夜かな

高橋芳子

柚人に鉄わたさる桔梗畑
廻施橋まはるたび増ゆ曼珠沙華
毬栗の落つる音あり夜の机
遠鹿や三角窓を月渡り

渡邊美保

走り根に齡ありけり昼の虫
秋徼雨真砂をあるく鹿の足
秋つばめ大樟に舟つなぎある
砂山に行合の空扇置く

垣岡瑛子

北門に僧待たせけり秋の蝶
莫塵の上の母が指図す葡萄狩
それぞれにくせのある夫心太
そこから中菊鉢並べ入院す

奥田順子

纜のすぐほどかれし秋の雲
半纏の背老いにけり盧は穂に
芋の葉の育ちすぎたる厄日かな
舷に蜻蛉ゆきかふ近江かな

村上留美子

先ほどの雨の雫や破芭蕉
誰かれに話しかけたき月の道
葦原にたそがれどきの人の声
真向ひは大文字山みなし栗

緒方佳子

夏掛を子等の積みたる寺畳
三角山の今宵のかたち温め酒
秋口の挨拶交すべしカリ
椅子二つ三つ新涼の闇魔堂